

第五回 土山に屯して関公三事を約す、関雲長印を掛け金を封ず

— 関羽と曹操 —

○前回から今回まで

劉備は、曹操に敗れて逃げ込んで来た呂布を親切にも受け入れたため、呂布の裏切りでせつかく手に入れた徐州を奪われてしまいます。劉備はやむなく小沛に移りますが呂布の猛攻を受けて、曹操のもとに逃げ込むことになりました。

その後、曹操は劉備と協力して呂布を攻撃し、呂布は捕らえられて曹操の前に引き出されます。

呂布は曹操に向かって命乞いをしますが、劉備が反対したため、「こいつこそ、いちばん信用できないのだぞ」と劉備を罵りながら処刑されます。ここに『三国志演義』きつての剛勇である呂布もついに最後を迎えました。

呂布を破った曹操の威勢はますます強まり、献帝をないがしろにする態度が顕著になると、憤慨した董承らがクーデタを計画して仲間をつのり、劉備もこれに加担します。

だが、劉備は口実をもうけて徐州にもどると、曹操のライバル袁紹と連携して、再び徐

州で自立することに成功します。

劉備の裏切りに激怒した曹操は、徐州に猛攻をかけて劉備を撃破します。このとき、劉備は単身、袁紹のもとに逃げ込みますが、関羽は踏み止まって劉備の二人の夫人を守ります。孤立無援に陥った関羽は、かつて命を助けた張遼の勧めを受け入れ、劉備の居所がわかつたら曹操のもとを去るなど、三条件を付けたうえで曹操に降伏します。

(本文抄)

関羽は日暮れまで戦ったが帰ることができず、とあるはげ山にたどりついて山の上で兵を休ませた。曹操軍はその山を包囲した。関羽が山の上から眺めたところ、下邳城から火の手があたり、天をもこがさんばかりであった。

関羽は何度も囲みを破って山をおりようとしたが、そのたびに追り返された。

夜明けになり、ふたたび山をおりようすると、馬を走らせ山を登って来る者がいる。これぞ張遼であった。

関羽は出迎えて声をかけた。

「これは文遠(張遼の字)どの、勝負しに来られたのか」

「違います。昔の友情を思い、久々にお話ししようと思ひやうて来たのです」と張遼。

「文遠どのは、私に降伏を勧めに来られたのではないか」と関羽。

「違います。以前、あなたは私を助けてくださいました。そのご恩返しにまいりました」と張遼。

「あなたがこの場で死ねば、三つの罪があります」と張遼。

「三つの罪とはなんだ」と関羽。

「劉玄徳殿とあなたが義兄弟の契りを結ばれたとき、生死をともにしようと思ひを立てられました。玄徳殿がふたたび世に出られ、あなたの力を借りたいと思われても、それがかなわなければ、あのとときの誓いに背くことになりすまいか。これが第一の罪です。

劉玄徳殿が家族をあなたに託しておられますのに、二夫人（劉備の二人の夫人、すなわち甘夫人と糜夫人を指す）は頼る者がなくなつてしまひます。それでは劉玄徳殿から託された信頼に背くことになりすまいか。これが第二の罪です。

あなたは、劉玄徳殿とともに漢王朝を助けることを忘れて、いたずらに匹夫の勇をふるおうとされるのは義と申せましようか。これが第三の罪です」

「私にこの三つの罪があるなら、どうしろというのか」と関羽は言った。

「ひとまず曹操殿に降伏され、そのうえで玄德殿の行方をさがし、所在がわかればすぐにそちらへ行かれればよいでしょう。そうすれば、第一に二夫人を守ることができ、第二に桃園の誓いに背かず、第三に世の中に役立つあなた自身の命も永らえることができます。この三つの利益があるのです」と張遼。

「きみは三つの利益があると言うが、私にも約束していただきたい三つの条件がある。

じょうしやう丞相が受け入れてくださらないなら、三つの罪を背負って死ぬまでだ」と関羽。

「その三つの条件というのをお聞かせください」と張遼。

「第一に、私は漢の皇帝に降伏するのであって、曹操に降伏するのではないということ。第

二に、二人の義姉上あねづえがた（甘夫人・糜夫人を指す）に皇叔こほうしやく（劉備のこと）の俸禄ほうろくをたまわ

り、いかなる者も門内に立ち入らせないこと。第三に、皇叔の行方がわかりしだい、千里万里せんりばんり

の彼方かなたであろうとも、ただちに馳はせ参まゐずること。どうかこの旨むね、お伝えいただきたい」と関

羽。

（解説）

関羽は張遼に、投降にあたり三つの条件を提示します。関羽は張遼に「曹操ではなく漢帝

に降伏する」「劉備の夫人たちを手厚く守る」「劉備の行方がわかり次第、辞去する」との三条件を提示しました。そして、曹操はこの三つの条件を承諾します。

『三国志演義』は「三」という数字を多用します。「豪傑三たり義を結ぶ」（劉備・関羽・張飛の義兄弟三人）、「三度徐州を譲る」、「三顧の礼」、「三分隆中の策」など、いくらでもあげることができます。

「三国時代」も「三」ですが、実はこの時代は四国時代としてもいいのです。当時、遼東地方には公孫氏の燕国が自立していて、魏や呉と交渉していました。したがって、魏・呉・蜀・燕の「四国時代」としても間違いではありません。

また、私はこどものころ「三銃士」を夢中になって読みましたが、その頃ずっと疑問がありました。それは、題名がなぜ「三銃士」であって「四銃士」ではないのか、ということでした。主人公はダルタニャンと銃士アトス、ポルトス、アラミスの四人です。ダルタニャンはのちに銃士隊の副隊長にまでなりますし、四人が活躍するのでどうみても「四銃士」だろうと。それなのに、なぜ題名が「三銃士」なのか。

ユング心理学では、「三」という数字は完全や完成にむかう力動的な意味を持つとされます。人間の深層心理に根ざすもので、洋の東西を問わず昔話や童話で象徴的な意味あいをも

つてしばしば使われています。

また、私たちの日常生活でも、意識せずに「三」という数字を使うことはとても多いです。道路をわたるときの信号は「赤・青・黄」の三色、掛け声は「いち、にー、の、さん」カッ プラーメンの待ち時間は三分・・・、まだまだいくらでも出てきます。このように、「三」という数字には、洋の東西を問わず何か人の心をとらえる不思議な働きがあり、人は知らず知らずのうちについて「三」という数字を使ってしまうのでしょうか。

話がそれましたが、こうして、曹操は関羽の三条件を承諾します。

(本文抄)

曹操はみずから関羽を出迎えた。関羽が馬から下りて平伏すると、曹操も慌てて答礼した。
と、関羽は言った。

「敗軍の将である私の命を助けてくださった恩義に、深く感謝申し上げます」

「かねて雲長うんちやう（関羽の字）どのの忠義に敬服いたしておったが、今日、こうして会うことができ、望みがかなったというものだ」と曹操。

「三つの条件を申し上げたところ、ご快諾いただいたとのこと、相違ありません」と関羽。

「いったん言った以上は、約束を違えることははしない」と曹操。

「皇叔（劉備のこと）の行方がわかりましたなら、たとえ火のなか水のなか、私は必ずそこへ行きます。そのとき、お暇乞いをする余裕はないかも知れませんが、どうかお許しください」と関羽。

「玄德殿がご健在とわかれば、そなたの好きなようにすればよい。まあ、方々尋ねてみればよからう」と曹操。

翌日、曹操は許昌への途についた。関羽は二人の夫人を車に乗せ、みずから護衛して出発した。

途中、宿場に着くたびに、曹操は君臣の礼を乱してやろうと思ひ、関羽と二人の夫人を同室させた。しかし、関羽は燭を手にして、夜の明けるまで戸外に立ちつくし、まったく疲れたようすを見せなかった。曹操は関羽のこの姿を見て、ますます敬服したのだった。

関羽が許昌に到着してからというもの、曹操は彼をとりわけ鄭重にもてなし、三日に一度は小宴会、五日に一度は大宴会を催した。また、十人の美女を贈つて、関羽の世話をさせようとしたが、関羽はすべて二人の夫人に仕えさせた。曹操はこの話を聞くと、またまた関羽を賛嘆してやまなかつた。

(解説)

ここは「燭しよくを乗りてと旦あしたに達いたる」という、関羽名場面の一つです。

曹操は関羽を乱させようとして、関羽を二人の夫人と同室させたが、関羽は灯あかりを手にして夜の明けるまで戸外に立ちつくします。また、十人の美女を側にと関羽に与えますが、関羽はすべて二人の夫人に差し出して仕えさせます。「連環の計」で、呂布と董卓が、貂蟬に手玉にとられたのとは大違いです。ここは、関羽の女性に対する潔癖けつぺきな態度を描きます。

じつは歴史書『三国志』では、関羽の女性に対する別の一面を描いています。

劉備が呂布りよぶに徐州をとられて曹操に身を寄せたときのこと。曹操は劉備とともに呂布を攻めます。このとき関羽は、「呂布の部将秦宜祿しんぎろくの前妻を自分に娶めとらせてほしい」と曹操に頼みます。曹操はこれを許しますが、呂布が敗れたとき、関羽は何回も念をおします。曹操は、これほど執心しゆうしんするからには、彼女はきつと美人なのだろう思います。そして予想は的中。曹操は彼女をそのまま手許てもとにとどめ置いたので、関羽の心中は落ちつかなかった、との記述があります。

何か笑いを誘うような関羽の姿ですが、これは、『三国志』関羽伝の注「蜀記しよくき」に引か

れている話で、「蜀記」は「この話は『魏氏春秋』の話と同じである」とも書いていますので、どうやら根も葉もない話ではないようです。

秦宜祿しんぎやくという人は呂布の部将で、使者として袁術えんじゆつの下へ救援要請に赴きますが、秦宜祿には杜氏とという妻がいて下邳かひに留まっていました。そして呂布滅亡後に曹操の側室そくしつとなります。秦宜祿は呂布が滅亡すると曹操に降り、梟の長官に任命されます。その後、劉備が曹操に反旗を翻ひるがえすと、張飛が秦宜祿のところにやってきて「妻を奪い取った男に仕えるのは愚かなことだ。私について来い」と勧誘かんゆうしました。秦宜祿は最初は受諾じゆたくしましたが、すぐに後悔こうかいして引き返そうとしたため、怒った張飛に殺されてしまいます。子の秦朗しんろうは生母が曹操の側室となったので、曹操の養子となり、後に魏ぎの重臣となっています。

このように小説と歴史書の関羽、同じところもあればかなり違うところもあります。

(本文)

ある日、曹操は関羽が身につけている緑色の錦にしきの戦袍せんぽうが古くなっているのを見て、立派な錦の戦袍を贈った。関羽はこれを受け取ると、下に着込み、その上にもとの古い戦袍を羽織おっていた。

曹操は笑つて言った。

「雲長^{うんちよう}どの、そんなに儉約^{けんやく}されなくてもいいではないか」

「儉約しているわけではありません。古い戦袍は劉皇叔から頂戴したもので、これを身につけていると、兄上の顔を見ているような気がします。兄上を忘れないよう、上に着ているのです」と関羽。

曹操は「まことの義士^{ぎし}とは、そなたのことだ」と感嘆したが、内心は愉快^{ゆかい}でなかった。

また、曹操が「雲長どののみごとな髻^{ひげ}は何本あるのかな」とたずねると、関羽は「数百本でしょう。秋になると抜けますので、黒い紗^さの袋でくるみます」と答えた。曹操は錦紗^{きんさ}で袋を作り、関羽に贈^{くわ}つて髻を包ませた。

翌日、朝廷で献帝^{けんてい}にお目通りしたい、献帝は関羽の錦^{にしき}の袋を見て、それは何かとたずねたところ、関羽は答えた。

「私の髻は長いので、丞相がここに入れるように袋をくださったのです」

献帝が袋をはずさせると、その髻は腹の下まであった。献帝は「まこと的美髻公^{びげんこう}だ」と感嘆した。これ以来、人々は関羽を「美髻公」と呼ぶようになった。

また曹操は関羽の馬が瘦^やせているのを見かけ、側^{かたわら}の者に一頭の馬を引いてこさせた。そ

の馬は全身焼けた炭のような赤い色で、はなはだ威風堂々としていた。

曹操は言った。

「この馬を知っているかな」

「呂布が乗っていた赤兎馬せきとばではありませんか」と関羽。

「そうだ」と曹操は言い、関羽に贈った。

関羽がくりかえし感謝したので、曹操は言った。

「これまで美女や金や絹を贈っても、きみは礼を言ったことがないのに、馬を贈るところも喜んで礼を言うのはなぜか」

と、関羽が「私はこの馬が一日に千里を行くことを知っております。今日、幸いにもこれをいただきました上は、兄上の居所がわかれば、一日で対面することができます」と答えたので、曹操は愕然がくぜんとして後悔した。

曹操は張遼ちやうりょうにたずねた。「わしは関羽を手厚く待遇しているのに、常に立ち去ろうとするのは、どうしたわけか」

張遼は翌日、関羽に会いに行つた。張遼は言った。

「私はあなたを丞相に推薦しました。待遇もわるくないと思いますが」

「丞相のご厚意には深く感謝しています。ただ、体はここにあって、心は皇叔（劉備）のことを思い、一刻も忘れたことはないのだ」と関羽。

「それはちがいます。玄徳どののあなたに対する扱いは、丞相にまさるものではありませんまい。どうしてひたすら立ち去ることばかり考えるのですか」と張遼。

「曹操殿がいかに私を厚遇してくださっているか、むろんわかっている。しかし、残念ながら私は劉皇叔から深く恩義をこうむり、ともに死のうと誓った仲ゆえ、背くことはできないのだ。けつきよくここには留まらないが、手柄を立て、曹公せうこうに恩返ししてから、立ち去るつもりだ」と関羽。

「もし玄徳どのがすでにこの世を去っておられたなら、あなたはどこへ行くおつもりですか」と張遼。

「冥土めいどまでついて行くだけだ」と関羽。

（解説）

関羽の名場面が続きます。錦の戦袍を曹操から贈られる関羽。しかしその戦袍は下に着込んで、あいかわらず古びた戦袍を羽織はおっていた。理由は兄貴の劉備を忘れないため、と。ま

さに、ぼろは着ても心は錦。

次いで贈られたのは、赤兎馬。かつて、呂布がまたがった名馬です。その時に「人中の呂布、馬中の赤兎」とうたわれました（『三国志』呂布伝の注「曹瞞伝」）。

他の贈り物には目もくれなかつた関羽ですが、赤兎馬には大喜びです。理由は、一日に千里を駆ける名馬なので、劉備の居所がわかればすぐに駆けつけることができる、と。ここでも劉備一筋の関羽です。

曹操は関羽に惚れ込み、何とか彼のような人物から心服されたいものだとして親切の限りを尽くしますが、どうしても関羽の気持ちを変えられません。

そして、その理由を張遼に聞きに行かせます。関羽の答えは、兄貴の劉備とともに死のうと誓った仲なので背くことはできない、と。まさに、男の信義の世界です。

歴史書『三国志』でも、関羽が「義」に厚い勇将であったことを、次のように記します。「初め、曹操は関羽の人となりを壮としたが、関羽の心には久しく留まる気持ちが無い事を察し、張遼に謂うには『卿（きみ）よ、試みに情によつて問うてみてくれ』と。

間もなく張遼が関羽に問うた処、関羽は歎息しつつ『私は曹公が私を厚く待遇してくれ
るのは極めてよく知つてている。しかし私は劉將軍に厚恩を受け、共に死すことを誓つてお

り、これに背く事はできない。私はずっとは留まらず、功績を立てて曹公に報いてから去るつもりだ』と。張遼は関羽の言葉を曹操に報せたが、曹操はこれを義とした（「関羽伝」）。

（本文抄）

袁紹は大将の顔良を先鋒とし、白馬に進撃した。

曹操は慌てて協議し、軍勢を出して敵を防ごうとした。これを知った関羽は、曹操に面会を求めて言った。

「どうか私を先駆けにしてください」

「將軍をわずらわせるまでもない。そのうち何かあれば、こちらからお願いにあがろう」と曹操。そこで関羽は退き下がった。

（※曹操は関羽が手柄をたてると、それを置き土産に去ってしまうのではないかと、関羽の申し出を断ります。しかし、つづけさまに二人の部将宋憲・魏統を顔良に打ち取られたので、やむなく関羽を呼び寄せます。）

曹操が指さして、「傘の下で、刺繡のついた戦袍に金の甲冑を身につけ、刀を手に馬に乗っているのが、顔良だ」と言うと、関羽は、「私には、顔良が目印を付け、首を差し出し

ているように見えます。やつの首を取って献上したいと存じます」と言つて立ち上がった。

関羽は馬に飛び乗り、青龍刀せいりゆうとうを手に持つて、まっすぐ敵陣に突つ込むと、敵の軍勢は大きな波のように分かれ、関羽はただちに顔良めがけて攻め寄せた。

顔良は、関羽が突撃して来たのを目にして、何か言おうとしたとき、駿足の赤兎馬しゅんそくせきしばはすでにその目の前に迫つていた。顔良は体勢を整える暇いとまもなく、関羽の一太刀ひとたちを浴び、刺し殺されて馬から転がり落ちた。関羽はその首をかき切つて、敵陣を駆け抜けた。そのありさまは、まるで無人の境地きょうちを行くようであつた。

関羽が、曹操の前に顔良の首を差し出すと、曹操は言った。

「將軍よ、あなたはまことに神のような人だ」

「なんの、私わたくしごときは問題にもなりません。私の弟の張翼徳ちやうよくとくは百万の大軍のなかで、まるで袋のなかの物を取り出すように、大将の首を取つて来ます」と関羽。

曹操は左右の者を顧かえりみながら、「今後、張翼徳に会うときがあれば、くれぐれも用心せよ」と言い、着物の襟えりにその名を書きつけるよう命じた。

曹操と袁紹の間で、華北の支配をめぐる官渡かんとの戦い」がはじまります。その前哨戦ぜんしやうせんが白馬の戦いです。ここで、関羽は敵の大將顔良を打ち取り、一人で白馬の囲みを解いてしまします。

『三国志』では、関羽の活躍を「袁紹、顔良を遣りて劉延りゆうえんを白馬に攻む。曹操、張遼・関羽をして（劉）延を救わしむ。（関）羽、（顔）良の磨蓋きがい（旗印と傘）を望見し、即ち馬を策さくして万人の中に良を刺し、その首を斬りて還る。紹の將、能く当る者なし」と短く書くだけです。『三国志演義』は関羽の最大の見せ場として、フィクションをまじえて盛り上げます。

曹操は、関羽が顔良の首を置き土産に去ってしまうのではないかと心配し、以前に倍して賞賜しょうしを加え、関羽を漢寿亭侯かんじゆていこう（最高爵である列侯の一つ）に封じます。

この後、とうとう劉備の居所が判明はんめいします。それを知った曹操は、張遼に関羽の気持ちを探ねにかせます。

（本文）

関羽はあれこれ思わずらい、いても立ってもいられなかった。曹操は張遼に命じて、関

羽の気持ちを探りにいかせた。

「あなたは玄德どのの行方を知られたとうかがいましたので、お祝いに参りました」と張遼。また、「あなたと玄德どのの交わりは、私とあなたの交わりに比べると、どちらがいますか」と張遼。

「私とあなたは朋友ほうゆうの交わりです。私と玄德さまは朋友でもあり、兄弟でもあり、主従でもありますから、とても同列には論じられません」と関羽。

「今、玄德どのかほくは河北えんしやう（袁紹のもと）におられるが、あなたはそこへ行かれるつもりですか」と張遼。

「昔の契りにそむくことは決してしません。どうか私の気持ちを、丞相にお伝えいただきました」と関羽。

関羽は曹操に別れの挨拶をすべく、丞相府へ向かった。

曹操は関羽が来たわけがわかっていたので、門に面会を断る札ふだをかけさせた。翌日、ふたたび丞相府に出かけたが、またも札がかかっていた。関羽はつづけて数回訪問したが、一度も会えなかった。

「これは、私の出発を許さないという意味だろう。すでに出発の決心はついているのだから、

これ以上留まってはられない」と思い、手紙を書いて曹操に別れを告げた。

関羽は、曹操から贈られた金銀を封印をし、漢寿亭侯の印を正堂に掛けたうえで、二夫人を馬車に乗せて進發した。

程昱は、「関羽をこのまま行かせれば、虎に翼を与えるようなものです。追撃してのちの禍を絶つに越したことはありません」と。

曹操は、「それでは信義を失うことになる。彼は彼なりに主君のためにしているのだ。追つてはならん」と。

「雲長（関羽の字）は、金銀財宝もその心を動かすことはできず、爵禄もその志を変えることができないということだ。わしは心から尊敬する。まだ遠くまで行っていないだろう。餞別を贈りたい。おまえは先に行つて、わしが見送りに行くまで、引き留めておけ。のちのちまでわしのことを覚えておいてもらいたいのだ」と張遼に命じた。

関羽は二夫人の車を護送しながら、ゆっくり進んでいた。

と、「雲長どの、お待ちください」と張遼が馬を飛ばしてやつて来た。

関羽は問いかけた、「文遠（張遼の字）どの、私を連れもどそうとなさるのか」

「ちがいます。丞相はあなたを見送りたいとおっしゃり、待つていただくよう、先に私を

遣つかわされたままでです。他意はありません」と張遼。

関羽が橋の上に馬をとどめて、はるかに眺めやると、曹操が数十騎を率いてやって来た。曹操が「雲長どの、どうしてこんなに早く行ってしまわれるのか」と聞く。

関羽は馬上で身をかがめ、お辞儀をして答えた。

「現在、旧主きゆうしゆ（劉備）は河北におります。私は行かねばなりません。何度もお屋敷にうかがいましたが、お目にかかることができませんでした。そこで、手紙をおとどけしてお別れ申し上げ、金を封印し官印を掛けて、お返しさせていただきました。どうか、以前の約束をお忘れになりませんように」と。

曹操、「わしは前言をひるがえしたりはしない。將軍が不ふ如意にょいになられてはと思ひ、路銀ろぎんを持って見送りに来たのだ」と言うと、一人の部将に、盆に乗せた黄金を差し出させた。

関羽、「重ね重ね恩賜おんしをいただき、まだ余分があります。どうかこの黄金はお納めください」

曹操、「大功の万分の一にでも報いたいのだ。辞退するには及ばない」

関羽、「微々びびたる事です。お心にかけていただくまでもありません」

つづいて曹操は、「雲長どのが天下の義士だ。わしに福が薄く、引き留められないのが残

念だ。錦の戦袍せんほういっちやく一着を受け取ってくれ。わしの気持ちだ」と言い、戦袍を捧げ持たせて渡すに行かせた。

関羽は曹操の気持ちを計りかねて、馬から下りず、青龍刀せいりゆうとうの切っ先に引っかけ、身にまとうと、感謝の言葉を述べ、

「丞相から賜った戦袍、ありがたく頂戴ちやうだいいたしました。後日またお目にかかれることもありましょう」

かくして北へ向かって去って行った。

曹操は諸将を随したがえて城へもどる途中、関羽のことを思い、しきりにため息をつくのであった。

(解説)

おもわず涙の出る、曹操と関羽の別れの場面です。曹操は、「義」をつらぬく関羽の人格を高く評価しました。曹操は関羽のことを「天下の義士ぎし」とよびます。黄河以南の三州を支配し、日の出の勢いの曹操。そのもとを去り、劉備と艱難辛苦かんなんしんくをともしようとす関羽。そこに迷いも葛藤かつとうもありません。関羽は自分の利害など全く眼中になく、劉備との信義の道

を進みます。これは、史実でもありません。

清代の歴史家張翼は次のように述べます。

「関(羽)・張(飛)・趙雲、少きより契を結び、終身奉じて以て周旋す。即ち、羈旅奔逃し、人の籬下(りか)に寄るも、寸土以て業を立つ可き無し。而るに数人の者、患難相隨い、別に貳志無し。此れ固より数人の者の忠義なれども、而して、(劉)備、亦た必ず深く其の隱微を結ぶことあらん。而して解すべからざるものか。」(『二十二史劄記』)

このように、劉備や関羽の信義にもとづく絆は、時代をこえて読む人を魅了してやみません。また、その絆に曹操も深く心を動かされたのでした。

唐代の詩人王維は、友情を結んだ阿倍仲麻呂の帰国にさいして詩を贈り、その序に、この関羽の信義に生きた姿を引いています。「関羽は恩に報じて終に去りぬ」と仲麻呂の旅立ちを、関羽が曹操のもとを去る姿に重ねています(『漢詩大系』第二〇、小林太市郎・原田憲雄、集英社)。

『三国志演義』には「義」という言葉がひっきりなしにでてきます。

前回と今回だけでも、「義兄弟の契り」、「これがどうして義といえようか」、「信義を失う」、「雲長どのは天下の義士だ」、「恩義に深く感謝します」等々・・・。

孔子は「義を見て為さざるは勇なきなり」と言い、孟子は「仁は人間にもともと具わっている心であり、義は万人の行くべき正しい道である。『孟子』（尽心章句上）」と言います。つまり、勇気をもって正しい道をすすむこと、これが義をおこなうことなのです。

関羽が「義」に厚い勇将であったことは間違いないですが、先にも述べましたように、『三国志演義』ではその実像よりも、はるかに立派に描かれています。

実際の関羽は、剛勇こうゆうという点では呂布にかなわなかったでしょうし、戦略という点でも呂蒙や陸遜りくそんにしてやられています。また、陳寿はその評で、冷静にその欠点も指摘しています（前出書）。

「関羽・張飛ともに国士の風格があつた。しかし、関羽は強情じやうじやうで自尊心が強く、その欠点のために身を滅ぼしたのは、道理からいって当然のことである」と。

後世、関羽が神として崇拜をされるようになったのは、『三国志演義』が彼の「義」を誇張して描いたからです。そこには、中国で伝統的に重んじられる「義」という道徳が背景にあります。『水滸伝』も、豪傑たちが兄弟の契りを結び、生死をともしにする信義の物語です。どちらの小説も、中国の人々の心の投影物ということができるのでしょう。